九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

楊貴妃文學史上における黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」

竹村, 則行
九州大学 : 助教授 : 中国古典文学

https://doi.org/10.15017/9713

出版情報：中国文学論集. 18, pp.78-112, 1989-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

楊貴妃文學史上における黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」

竹村則行

一

本稿は、唐末五代梁の文人黄滔が詠んだ律賦「明皇迴駕經馬嵬賦」について、基礎的且つ總體的な考察を加えることを目的とする。該賦は、安祿山亂の終息後、成都から長安へ還御する明皇（玄宗）が、亂の渦中にあえなく沒した楊貴妃を葬った馬嵬坡を經過した際の感懷を中心に詠んだ三百六十一字から成る律賦である。本稿では、特にその叙情性、律賦としての性格、更には全體的に見て楊貴妃文學史上における位置付け等々の觀點を中心にして考察を進めたい。また、管見の及ぶところでは、黄滔及び該賦に關する專論は本稿が最初の試みであると思われるので、本稿においては、黄滔の紹介も兼ねて、その傳記、詩文集についての概略を述べ、あわせて末尾に「明皇迴駕經馬嵬賦」の全文を附することにする。

二

黄滔の傳記資料はいずれも斷片的であり、內容的にも豐富ではない。ここでは、『十國春秋』卷九十五、『福州府志』卷六十、及び『莆陽黄御史集』（叢書集成初編所收）附錄等の記述を參照しつつ、そのあらましを見てゆくことにする。

黄滔は字は文江、福建莆田の人である。幼少期の經歷は明らかでない。唐昭宗の乾寧二年（八九五）、進士に及第している。及第者は初め二十五名であったが、昭宗が更に親しく武德殿において覆試を行ない、最終合格者を十五名に絞ったものである。黄滔はこの合格者十五名中に含まれる。その及第者十五名、落第者十名の姓名を、いま『登科記考』卷二十四、乾寧二年の記事によって示せば次の通りである。

及第者十五名：趙觀文・程晏・崔賞・崔仁寶・盧瞻・韋說・封渭・韋希震・張蠙・黄滔・盧鼎・王貞白・沈崧・陳曉・李龜禎。

落下者十名：張貽憲・孫溥・李光序・李樞・李途・崔礪・蘇楷・杜承昭・鄭稼・（盧賡）[1]。

なお、この時の知貢擧は崔凝であった。

黄滔は、同じ昭宗の光化年間（八九八―九〇〇）に四門博士に除せられ、天復元年（九〇一）には、梁太祖朱溫の辟召を受けて監察御史裏行、充威武軍節度推官に遷った。やがて、天下が四分五裂となった唐末五代に、黄滔は故郷の閩に歸り、福州威武軍節度使（のち閩王）となった王審知の幕客となり、その「規正」（ただし直すこと）に力量を發揮するようになる。

この黄滔の福建歸鄉の事情について、『莆陽黄御史集』に附する宋・洪邁の序文は次のように述べる。

方に登科せんとする時、昭宗の季年に適る。猶ほ殿廷に覆試し、再び選に中り、然る後に官を得。未だ幾くならずして朱梁國を移す。因りて閩に歸り復た西せず。故に克く大いに世に章顯せざるなり。

つまり、黄滔の歸閩も朱梁の移國（國を盜むこと）に起因したものであり、黄滔が以後ずっと鄉里の閩に隱棲して餘生を送ったがために、名聲が世に大いに顯われることはなかったというのである。

以上あらまし述べたその經歷を見てみると、黄滔の傳記資料が內容的に乏しい理由の一端として、洪邁も既に指摘する樣に、彼が唐末五代梁の時代にあって、その活動の中心を主に福建という地方空間においていたことが擧げられるであろう。活動の記錄としての資料は、常には主流たる中央の活動に付隨してもたらされ、地方活動の記錄が傳存されるのはむしろ例外である。むろん地方在住の文人の全てが資料に乏しいわけではなく、また中央在住の文人がいつも豐富な資料を殘すわけでもない。しかし、黄滔の場合、その傳記の主要な記事が、進士合格及び任官という中央政事に關わること以外はほとんど空白に近いのである。これらの事由を考えるとき、やはり彼が主に福建地方に據って活動した文人であることから來る種々資料の乏しさは否めないであろう。しかしながら、更に一歩進んで考えれば、今日多くの文人の行跡が既に湮滅している中にあって、黄滔の場合、次章において述べる樣に、その文集が後裔の熱心な發掘と保存とによって今日にまで傳えられていることは、まだしも特筆すべき快事であると言わねばならない。

黄滔が閩中において活躍した絶對年代は明らかでないが、文學史的に見て注目すべきことは、この騷亂の時期、

閩に遊び、或いは閩に避難して來た中州名士と黄滔との交遊である。即ち、『莆陽黄御史集』に附する吳源の「莆陽名公事述」には、この時期に黄滔と莫逆の交りをなした中朝の士大夫として、

常侍李洵
翰林承旨韓偓
中舍王滌
補闕崔道融
大司空王標
吏部夏侯淑
司勳員外楊承休
御史王拯
宏文館直學士楊贊圖
館閣校勘王綢歸
集賢校理傅懿

らの諸名士の名をあげ、また詩文の唱酬を重ねた詩友として、

羅給事隱
陳侍御嶠
楊貴妃文學史上における黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」(竹村)

翁諫議承贊
陳明經黯
徐正字寅
林明經喬

らの名をしるす。黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」の制作もまた、これらの名士詩友との交流と無關係なものではなかったことは、後章において、これらの詩人の詠んだ楊貴妃故事詩を吟味してゆきながら檢證してみるつもりである。

三

黄滔の詩文集は、『新唐書』卷六十、藝文志四に、

黄滔集十五卷
黄滔泉山秀句集三十卷

と記錄されるのが初見であるが、いずれも散佚して傳わらない。その後、『宋史』卷二〇八、藝文志七に、

黄滔編略十卷
黄滔莆陽黄御史集二卷

と記錄する。また、元・馬端臨『文獻通考』卷二四三には、

黄御史集

とのみあって、楊萬里撰の「黄御史集序」を節録する。更に『福州府志』巻七十二、藝文に、

黄滔集十五卷

黄滔泉山秀句集三十卷

とあるのは、『新唐書』巻六十の記載をそのまま轉記したものの如く思われる。

いま、南宋淳熙三年（一一七六）の日付を有する楊萬里の「黄御史集序」、及び紀昀『四庫全書總目』巻一五一の『黄御史集』條の記述によれば、黄滔詩文集の發見及び整理のあらましは以下のようである。

黄滔の詩文集は久しく湮滅していたのを、まずは黄滔より二百年後の九世の裔孫である永豐明府黄沃の父考功公黄公度[2]が僅かに四卷を得、その後、黄沃自身も黄滔の詩文五卷を呂夏卿の家より得た。また黄滔の逸詩を翁承贊[3]の家より得、さらには黄滔の銘碣文を佛陀、老子の「宮」より得て、これらを合せて十卷として刻したものである。従って、今日に傳存する『黄御史集』十卷の最大の功勞者は、この黄滔九世の裔孫たる南宋の黄沃である。

この黄沃の輯録した『黄御史集』十卷は南宋淳熙丙申（三年、一一七六）の初刻であり、明の正德癸酉（八年、一五一三）に二十世孫の黄希英によって再刻され、萬曆甲申（十二年、一五八四）に十九世孫の黄廷良によって三刻され、崇禎戊寅（十一年、一六三八）に二十二世孫の黄鳴喬・鳴俊、及び二十三世孫の黄起棉・起有・起雒によって四刻されている。『四庫全書』本の『黄御史集』十卷は、その提要に、

此の本は卽ち崇禎の刻なり。

と明言する如く、最後出の崇禎十一年の刻本を用いている。我が國では、國立公文書館（舊內閣文庫）の紅葉山文庫・林大學頭家本・毛利高標本のそれぞれに明萬曆刊本がそれぞれ一部ずつ、計三部が架藏されている。このうち、林家本と毛利本とは同一の刊本と思われる。更に靜嘉堂文庫に淸刊本を藏する。また、近來の影印本では、『天壤閣叢書』所收の『莆陽黃御史集』二卷別錄一卷附錄一卷が『叢書集成』初編文學類に影印されており、さらに『四部叢刊』集部には閩縣李氏觀槿齋所藏になる明萬曆刊本『唐黃先生文集』八卷が影印されている。また『王氏彙刻唐人集』にも『唐黃御史集』八卷附錄一卷を彙刻するというが未見。(4)（この他、『全唐詩』卷七〇四―七〇六に黃滔詩三卷、『全五代詩』卷八十四―八十五に黃滔詩二卷、『唐詩百名家全集』に「黃滔詩集」二卷、『中晚唐詩紀』に「黃滔詩」一卷等を輯錄する。）

本稿においては、主に『四庫全書』本に據りつつ、適宜に各本を參照することにする。

四

黃滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」は、

莆陽黃御史集（叢書集成初編所收）

黃御史集（四庫全書所收）

唐黃先生文集（四部叢刊集部所收）

等の專集のほか、

全唐文卷八二二
歴代賦彙外集卷十四
馬嵬志卷八

等の諸本に收錄するが、『唐文粹』『文苑英華』等の總集には採錄されていない。(『文苑英華』に採錄されない理由として、清・李調元『賦話』卷二は、『文苑英華』所收の律賦は「雅正を以て宗と爲した」ためであるとする。)

いま、そのあらましを述べれば以下の通りである。總三六一字から成る「明皇迴駕經馬嵬賦」は、二十五聯五十句の對句から構成される。[5] 今その五十句にそれぞれ1～50の句番號を付して內容構成を考察すれば、およそ次の四段に分別されよう。(卷末附錄參照)

第一段(1句～12句、韻字は原・門・魂・痕、悄・曉・鳥)
第二段(13句～26句、韻字は讐・遊・頭・留、急・入・及)
第三段(27句～44句、韻字は程・清・生、跡・陌・魄、粧・翔・芳)
第四段(45句～50句、韻字は遇・顧・數)

第一段は序段として、玄宗(明皇)が蜀より長安へ還御する途次、馬嵬の楊貴妃墓を經過する樣子を述べる。第5句「日慘風悲、到玉顏之死處」が、明皇の心況描寫も含めてこの段の情況を巧みに表現する。第3・4句「香鼇闕而難尋豔質、經馬嵬而空念香魂」とは、遙かに長安の宮闕を望む馬嵬坡まで歸って來た明皇が、空しく楊貴妃を追憶する貌を述べる。やがて長安の故宮に歸った玄宗は、扃(かんぬき)を下して一人夜明けまで默念し(第10句)、褒斜谷の

猿の鳴き聲にも斷腸の思いがし、あの堅く誓った比翼の鳥も今や長安の樹林に棲む一双の凡鳥にさえ及ばないのであった（第11・12句）。

第二段は、安祿山軍の侵寇によって長安を脱出した玄宗（明皇）が、馬嵬において、楊貴妃の慘殺に遭遇する場面である。第19句「羽衞參差、擁翠華而不發」とは、馬嵬驛に宿泊した翌朝、不隱な動きを見せる近衞軍が玄宗一行を軟禁してしまい、出發を肯じなかったことをいう。彼らの最終的な要求は、20「紅袖以難留」すなわち一連の事變の禍根たる楊貴妃の死であった。やがて事態は急を告げ、幾筋もの涙が頰を傳って流れる中を、四面の羽衞軍の馬蹄にかけられて、楊貴妃は無殘な死を遂げる[6]（第23・24句）。あの神女の如き楊貴妃の美貌も今は歸らぬものとなり、篤い天恩も徒らに空しく及ばないものとなったのである（第25・26句）。

第三段は、やがて蜀の成都から長安に還御した明皇（玄宗）が、その歸りしな、馬嵬の「此の地」（31句）を經過した時の情景を描く。曾て慌しく楊貴妃の死屍を埋めた土墳には今や鳥の足跡が點々とあり、また蟬の蛻（ぬけがら）もあって、楊貴妃の靈魂の遷化を思わせるのであった（第33・34句）。楊貴妃亡き今、雨鈴曲も徒らに空しく演奏されるばかりであり、龍腦の芳香もその靈魂を蘇生させることはできない（第37・38句）。このようにして、長安で一人すごす玄宗の孤獨の心情とは裏腹に、宮殿の菱花は楊貴妃の生前と同じく勢いよく照り輝いており、驪山の七夕の夜は曾てと變らず楡の葉が芳香を放っているのである（第43・44句）。この43・44句の一聯は、毎年その季節が來れば變わらず美しい花をつける植物に比して、一度死ねば決して生き歸らない人間の生命のはかなさを對比的に描く。劉希夷の「代悲白頭翁」詩に「年年歲歲花相似、歲歲年年人不同」と述べるのに相似た發想である。

第四段は、一篇の主題を述べる最終段である。ここで黄滔は、國家を有する尊い天子といえども、國を傾けるほどの美人に出會うことはほとんど無いこと、つまり玄宗が楊貴妃に遇ったことは全くの稀有であること（第45・46句）、天寶の天子たる玄宗がどうして國を傾けることを望もうか（第47・48句）、されば、楊貴妃に起因して安祿山の亂を招いたとしても、蓋しそれは聖唐の運命だったのであって、楊貴妃にも玄宗にもその責任は無いのだと擁護して、一篇の叙述を締め括る。黄滔のこの賦は、安祿山亂に伴なう國家存亡の危機を「聖唐の數（さだめ）」ということで一切の因果をまとめており、聖唐に續く五代梁の作品とはいえ、時代社會諷諭の精神は直接には見られない。してみると、作者の意圖は玄宗楊貴妃の諷諭には無く、もっと別のところにあった様である。では、黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」の主題は一體何であろうか。

該賦の主題について作者の明言は無いが、私の見るところ、それは明皇楊貴妃をめぐる情愛の描寫にあったように思える。作品の主場面が、聖駕を蜀から長安に迴らす途次に馬嵬の楊貴妃墓をよぎる場面に設定されているのは、明皇楊貴妃の情愛の展開において、まことに最も効果的な場面の一つであった。卽ち、この場面では、眼前の土墳に眠る楊貴妃に觸發されて、曾て生前の歡樂の思い出が想起され、馬嵬變における生々しい慘殺にあわせ、爾後を孤獨に生きる明皇の姿が最も効果的に對照的に描き得るのである。該賦中に頻用される心理・感情表現もまた、この主題の最も具體的な表明となる。卽ち、空念（4）・慘、悲（5）・愁、泣（6）・積恨綿綿（7）・傷心悄悄（8）・斷腸（11）・愴恨（20）・珠淚（23）・悽惻（32）・空（39）・半死（41）・失（42）等々がそれである。

そして、該賦がこのような叙情を中心とする作品であることは、その背景としての唐末五代における主情文學思潮との深い關連が察せられる。以下の章において、そのことについて少しく模索してみたい。

五

黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」の大きな特色は、明皇楊貴妃の情愛の深さを警拔な着想によって律賦形式に巧みにまとめ上げたことにある。則ち、該賦は肅宗の至德二載（七五七年）十二月、[7] 蜀より長安へ還御した明皇が、楊貴妃墓のある馬嵬坡を通過した時の心情を中心にして構成したものである。明皇が楊貴妃墓に再會した正確な日付けは不明であるが、明皇が出路と同じく馬嵬を經由して長安へ歸還したこと、そしてその馬嵬には、去る一年半ほど前に已むなく慘殺された楊貴妃が眠る土墳[8]が在ったことは紛れもない歴史事實である。安祿山亂に伴なう避難の渦中という萬已むを得ぬ事情だったとは言え、最愛の楊貴妃に永訣の言葉を告げなければならなかった玄宗の心情は如何ばかりであったろうか。そして一年半後、その楊貴妃墓に再會した明皇（玄宗）の心中は更に如何なものであっただろう。歡樂が強ければ哀情も深い。生と死の世界に別れた二人の情愛に主眼をおいて考えるとき、この馬嵬の楊貴妃での對面の情景こそは、その情愛の展開においてまことに恰好の場面であった。[9] 馬嵬の楊貴妃墓を詠んだ從來の文學作品に就いては、既に白居易の「長恨歌」に

天旋日轉回龍馭　　天旋り日轉じて　龍馭を回らす
到此躊躇不能去　　此に到るや　躊躇して去る能はず

馬嵬坡下泥土中　　馬嵬坡の下　泥土の中
不見玉顔空死處　　玉顔を見ず　死せし處空し

とあって、この場面を活寫する。更に白居易の晩年の友人劉禹錫には「馬嵬行」がある。また、後述するように、黄滔の友人の羅隱や徐寅、崔道融にも馬嵬を詠んだ詩がいくつか散見する。(更に近著『馬嵬坡詩選』[10]には、唐代はもとより、現當代に至る馬嵬楊貴妃墓を詠んだ詩四百餘首を集錄する)。黄滔のこの賦は、發想において、それらの中晩唐五代詩と無關係ではないであろう。しかし、黄滔のこの賦は、馬嵬に回駕した明皇の心情を專ら律賦の形式に詠んだという點で、それらの諸詩には見られない强烈な印象と獨自性を有する。この點において、該賦は楊貴妃故事を詠んだ作品から成る所謂楊貴妃文學史上において、一種獨特の光輝を放つのであり、蓋し筆者が敢て拙稿を草する所以である。

さて、黄滔の該賦が據った律賦という作品の形式は、主に唐宋において科擧試に課せられた、對句・押韻等に嚴格な制約を有する韻文を指していうものである。この科擧試に出題された實用文であることが、律賦の興亡に大きく關わる。則ち、律賦は科擧試に出題されたことによって、當代の文人には科擧受驗對策として大いに重視されたのであるが、逆に律賦を律する嚴格な制約自體がその文學性の發露を減殺するに至らしめたことは否めない。その典型的な一例を、我々は比較的多くの律賦資料を殘す白居易の律賦に見ることができる。[11]しかし、その必然の反動であろうか、唐末に至って、幾らかの律賦の中には、この種の制約を凌駕し、抒情性のある文學作品としても通用する律賦が誕生するに至った。この間の事情について、馬積高『賦史』[12]三六一頁は次のように述べる。

律賦が人に貶められる主要な原因は、それが唐代科擧制度の產物であり、現存する唐の律賦の多くが科擧受驗又は受驗準備の作品であるからであって、これでは當然良い作品は生まれにくい。しかしこれは一般の情況に就て言ったまでであり、その中に例外が無いわけではない。とりわけ唐末の律賦は、有るものは已に科擧の制約から脫け出し、抒情小賦の一體となり、すばらしい文學作品となったものもある。

そして、黃滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」もまた、まことに馬氏がここに指摘するような、唐末五代に盛行した抒情的な文學作品としての價値の方がより高いのであって、科擧試との直接の關連はむしろ乏しいように察せられる。

今日に傳存する黃滔の賦作品は、以下の二十二篇を數える。(『四部叢刊』『四庫全書』『全唐文』いずれも同じ。)

○周以龍興賦
○明皇迴駕經馬嵬賦
○以不貪爲寶賦
○景陽井賦
○課虛責有賦
○送君南浦賦
○水殿賦
○狎鷗賦
○知白守黑賦

○漢宮人誦洞簫賦賦
○省試、人文化天下賦（乾寧二年《八九五》及第）
○館娃宮賦
○陳皇后因賦復寵賦
○秋色賦
○戴安道碎琴賦
○融結爲河嶽賦
○魏侍中諫獵賦
○誤筆牛賦
○省試、王者之道如龍首賦（乾符二年《八七五》下第）
○白日上昇賦
○御試、曲直不相入賦（乾寧二年《八九五》覆試）
○御試、良弓獻問賦（乾寧二年《八九五》覆試）

このように黄滔は、晩唐五代の詩人としては群を抜いて多くの賦作品を残すが、數量だけでなく、その内容に就いても括目すべきすばらしいものがあった。宋・洪邁「唐御史公集序」は、次のように、該賦を含む黄滔賦の迫眞性を賞讃する。

「馬嵬」「館娃」「景陽」「水殿」の諸賦は雄新雋永にして、人をして之を讀まば卷を廢して太息し、身は是の時に生じ、目は其の故を攝るが如くならしむ。文を爲ること是の若くんば、其れ亦た貴ぶべし。

また、清・李調元『賦話』(13)卷二においても、次のように黄（滔字は文江）の律賦の獨自性をほめている。

按ずるに、晩唐の律賦は前人に較べて更に巧密と爲る。王輔文、黄文江は一時の瑜亮（周瑜・諸葛亮）なり。文江は戛戛として獨造し、一字も人の猶きを肯ぜず。

先にあげた黄滔の諸賦のうち、「人文化天下賦」「王者之道如龍首賦」「曲直不相入賦」「良弓獻問賦」の四篇の律賦は、乾符二年、乾寧二年の省試及び覆試に實際に出題されたものの答案である。その他の諸賦の制作年、制作の動機は明白でない。

然して、本稿に取りあげた黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」は、科擧試に實際に出題されたとか、その爲の入試對策用の模擬答案というような科擧試に直接關わる作品ではないであろう。馬積高『賦史』(12)三七二頁もまた、黄滔のこの賦を「館娃宮賦」「送君南浦賦」「漢宮人頌洞簫賦」「陳皇后因賦復寵賦」の諸賦とともにあげ、科擧試の題目らしくないと指摘している。私が考えるに、黄滔の該賦は、押韻・對句はともかくとして、その主題部の叙述が何よりもこの賦の制作目的を如實に物語る。則ち、その第45—50句、

45 大凡有國之尊　　大凡（おほよそ）　國を有（も）つの尊きも
　　罕或傾城之遇　　傾城の遇するは罕（な）し
　　孰言天寶之南面　　孰（たれ）か言はん　天寶の南面ありて

奚指坤維而西顧　　奚(いづく)んぞ坤維を指して西に顧(かたむ)けんや
然則起兵雖自於青娥　　然らば則ち　起兵は青娥よりすと雖も
斯亦聖唐之數　　斯れ亦た聖唐の數(さだめ)なり

は、玄宗が楊貴妃にめぐり會って〝國を傾けた〟ことを〝聖唐の運命〟だとして詠嘆するのであり、治國平天下の有爲の人材を選拔する科擧の模擬答案としてはふさわしくないであろう。後述の如く、八八一年に黃巢の亂によって長安を後にした僖宗が、八八五年に、やはり蜀より馬嵬を經て長安に還御したという史實も、この題目が科擧に出題されたという予測を困難にさせる。それよりもむしろ、黃滔は該賦において、專ら律賦という新奇な形式を藉りつつ、そこに楊貴妃故事を巧みに取り込んだ叙情的な文學作品を制作することを主眼としたと考える方が、作品の內容上からも、また文學史的な背景からも妥當な見解であるように思うのである。

六

黃滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」は、その着想といい、叙情性といい、律賦にまとめあげた才力といい、作者の非凡な才能をうかがわせ、楊貴妃文學史上においても一種の特異な位置を占める佳篇である。しかしこの作品は、唐末五代において、何も無い全くの空白から突如單獨に出現したものではなく、當時の文壇における楊貴妃故事の愛好、更には叙情文學の盛行が底流にあって、始めて必然的に出現したものであると考えられる。ここでは、そのことを、晚唐五代の著名な詩人である羅隱、徐寅、崔道融等の黃滔の友人の詩に現れた楊貴妃故事詩、とりわけ馬嵬

を詠んだ詩に就いて檢證してみたい。

その前に、まず黄滔自身が詠んだ楊貴妃故事詩について見ておくことにする。四庫全書本『黄御史集』巻四によると、「馬嵬三首」(14)と題する七絶詩がある。

鐵馬嘶風一渡河　鐵馬　風に嘶き　一たび河を渡れば
淚珠零便作驚波　淚珠　零ちて便ち驚波と作る
鳴泉亦感上皇意　鳴泉　亦た上皇の意に感じ
流下隴頭嗚咽多　隴頭を流下して　嗚咽すること多し

龍腦移香鳳輦留　龍腦　香は移り　鳳輦留まる
可能千古永悠悠　能く千古　永に悠悠たるべし
夜臺若使香魂在　夜臺　若し香魂をして在らしめば
應作烟花出隴頭　應に烟花と作りて　隴頭を出づべし

錦江晴碧劍鋒(ママ)奇　錦江は晴碧にして　劍鋒は奇なり
合有千年降聖時　合に千年　降聖の時有るべし
天意從來知幸蜀　天意　從來　蜀に幸するを知れり

不關胎禍自蛾眉　　胎禍の蛾眉よりするに關わらず

これらの詩は、いずれも馬嵬に眠る楊貴妃墓に因んで詠まれているが、情況設定が今一つ具體的でない怨みがある。或いは黄滔が馬嵬の現地に立っての所懐ではなく、單なる想像上の習作であろうかと思われる。第二首「夜臺」（墓穴）「香魂」等の語はいよいよその感を深からしめる。いずれにしても、黄滔にこのような馬嵬の楊妃故事を詠んだ詩が現存することは、その「明皇迴駕經馬嵬賦」制作の背景としての關連を認識しておいてよいことである。

さて、その黄滔と羅隱、徐寅、崔道融らとの間に格別に深い親交があったことは、『莆陽黄御史集』に附する吳源の「莆陽名公事述」が次のように銘記することから明らかである。

居嘗與羅給事隱・陳侍御嶠・翁諫議承贊・陳明經黯・徐正字寅・林明經喬、爲莫逆交、見於唱酬詩集。

また、『黄御史集』に

○寄徐正字寅（卷一）

○酬徐正字寅（卷二）

○寄羅郎中隱（卷三）

の諸詩があり、『五代史補』卷二には

○黄滔命徐寅代筆

の記事があり、更に崔道融と黄滔との交友について、『十國春秋』卷九十五に

道融素と黄滔と善し。其の卒するや、滔、文を爲り之を祭る。

とあり、『黄御史集』巻六に「祭崔補闕道融」文をおさめることから、黄滔と羅隱・徐寅・崔道融らを結ぶ交友の絆の深さが裏付けられる。

いま、これらの三詩人について、個別にそれぞれの詩例を検討してゆくことにする。羅隱の楊貴妃故事を詠んだ詩を『羅昭諫集』巻四によって見てみれば、まず「華清宮」と題する七絶詩がある。

樓殿層層佳氣多　樓殿層層として　佳氣多し
開元時節好笙歌　開元の時節　笙歌を好む
也知道德勝堯舜　也た道德の堯舜に勝るを知るも
爭奈楊妃解笑何　楊妃の解笑ふを爭奈何せん

ここで羅隱は、開元中に玄宗がこの華清宮において「笙歌」するのを好んだことを述べ、その道德は古の堯舜にも勝るものであったにも關わらず、愉樂に淫したが爲に、竟には楊貴妃の笑いを導いて、亡國の危機に至らしめたことを嘆く。華清宮における楊貴妃の笑いが、蓋し亡國の笑いであったことについては、拙稿「楊貴妃の笑い」(16)を參照。『十國春秋』巻八十四によれば、この詩の第三、四句があることによって、羅隱の甲科合格が沙汰止みになったという。

續いて「馬嵬坡」と頭する七絶詩がある。

佛屋前頭野草春　佛屋の前頭　野草春なり

貴妃輕骨此爲塵　貴妃の輕骨　此に塵と爲る
從來絕色知難得　從來　絕色　得ること難きを知るも
不破一作得中原未是人　中原を破らずんば　未だ是れ人ならず

ここで羅隱は、馬嵬の佛寺のほとりに眠る楊貴妃について回想し、古來「絕色」の得難いこと、假にそれを得ても中原（天下）を得なければ英雄ではないことを述べる。第四句「不破中原不是人」とは、安祿山の亂によって已むなく中原の中國を放棄した玄宗への貶辭を込めたものであろう。（破字は全唐詩卷六五七では「一作得」とある。）

次では「帝幸蜀」と題する七絕詩である。

馬嵬山色翠依依　馬嵬の山色　翠依依たり
又見鑾輿幸蜀歸　又見る　鑾輿の蜀に幸して歸るを
泉下阿蠻應有語　泉下の阿蠻　應に語有るべし
這回休更怨楊妃　這の回は　更に楊妃を怨むを休めよ

詩題の「帝幸蜀」とは、中和元年（八八一）、晚唐の僖宗が黃巢の亂を避けて蜀へ蒙塵し、やがて光啓元年（八八五）、蜀より馬嵬を經て長安に還御した歷史事實を指す。[10] 玄宗のそれより一二八年後の事である。第二句「又見る」とはこのことの謂である。この詩は僖宗が蜀から還御する折に馬嵬の楊貴妃墓を經過した際の感懷を詠む。從って直接に玄宗楊貴妃に取材したものではないが、やはり馬嵬の楊貴妃墓に詩作の動機を持つものである。（更に羅隱には、「書馬嵬驛」文がある。（『全唐文』卷八九六、及び『羅隱集』[17] 讒書卷五。）

次に、徐寅は黄滔と同郷の福建莆田の出身であり、黄滔とは特に深い親交がある。四庫全書本『徐正字詩賦』の提要に、

（徐）寅、字は昭夢、莆田の人。乾寧元年（八九四）進士及第。秘書省正字を授けらる。後に王審知の幕府に依り、延壽溪に歸老す。

とあるところからすれば、黄滔と徐寅とは同郷であり、一年違いの進士であり、且つ又王審知幕下の同僚という深い關係にあったことがわかる。さて、その詩賦集『徐正字詩賦』(18)巻二には、「華清宮」と題する七律詩がある。

十二瓊樓鏁翠微　十二の瓊樓　翠微鏁し
暮霞遺却六銖衣　暮霞に遺却す　六銖の衣
桐枯丹穴鳳何去　桐は丹穴に枯れ　鳳　何くにか去る
天在鼎湖龍不歸　天は鼎湖に在して　龍歸りまさず
簾影罷添新翡翠　簾影　添ふるを罷む　新しき翡翠
露華猶濕舊珠璣　露華　猶ほ濕ほふ　舊き珠璣
君王魂斷驪山路　君王　魂斷す　驪山の路
且向蓬瀛伴貴妃　且に蓬瀛に向て　貴妃を伴はん

ここで徐寅は、今や主もなくさびれ果てた華清宮の惨狀を描寫しながら、あの世の蓬萊宮での玄宗と楊貴妃の逢瀬を夢想している。

次で七律「再幸華清宮」詩である。

腸斷將軍改葬歸　腸斷す　將軍　改葬して歸るに
錦囊香在憶當時　錦囊に香在りて　當時を憶ふ
年來却恨相思樹　年來　却って恨む　相思樹
春至不生連理枝　春至るも　生ぜず　連理の枝
雪女塚頭瑤草合　雪女の塚頭に瑤草合し
貴妃池裏玉蓮衰　貴妃の池裏に玉蓮衰ふ
霓裳舊曲飛霜殿　霓裳の舊曲　飛霜殿
夢破魂驚絶後期　夢破れ　魂驚き　後期絶ゆ

この詩は、長安に還御した明皇（玄宗）が、翌七五八年十月、楊貴妃との思い出の地である華清宮へ單獨行幸した折の感懷を記したものである。『資治通鑑』巻二二〇、肅宗乾元元年（七五八）の條に、

冬、十月、……甲寅、上皇幸華清宮、
十一月、　丁丑、還京師。

と記す。徐寅のこの詩では、楊貴妃在りし頃の歡樂の記念として、錦囊、相思樹、連理枝、雪衣女（白鸚鵡）、貴妃池、霓裳曲等に楊貴妃を偲びながら、今はかなわぬ果敢ない夢を追憶している。

次には七律詩「開元卽事」がある。

曲江眞宰國中訛　曲江の眞宰（楊國忠）　國中に訛り
尋奏漁陽忽荷戈　尋で奏す　漁陽（安祿山）　忽ち戈を荷ふと
堂上有兵天不用　堂上に兵有るも　天用ひず
幄中無策印空多　幄中　策無く　印のみ空に多し
塵驚騎透潼關鎖　塵は騎透するに驚き　潼關鎖さる
雲護龍遊渭水波　雲は龍遊するを護り　渭水波だつ
未必蛾眉能破國　未だ必ずしも蛾眉（楊貴妃）　能く國を破らず
千秋休恨馬嵬坡　千秋　馬嵬坡を恨むを休めよ

この詩において、徐寅は、楊國忠、安祿山をめぐる開元天寶の故事を詠み、その結句において、一國の存亡の危機を招いたのは楊國忠であって、楊貴妃が國を亡した譯ではないのだから、馬嵬坡の楊貴妃墓を恨むことは無いとしている。この詩は、安祿山の亂を招いた「傾國」の美女楊貴妃の寃罪を晴らすことを意圖したものである。

更に、徐寅には、「依溫飛卿華清宮二十二韻」詩がある。これは、溫庭筠の「過華清宮二十二韻」詩（『全唐詩』卷五八〇）に次韻して華清宮にまつわる故事を詠んだものである。（韻字は遊・秋・樓・頭・侯・裘・旒・收・斿・羞・鉤・州・榴・虬・牛・尤・籌・騮・休・丘・愁・流……下平聲尤・侯・幽韻、同用。）紙幅の都合により、引用紹介は割愛する。

最後に、徐寅にもやはり「馬嵬」と題する七絶詩がある。

二百年來事遠聞　二百年來　事遠かに聞ゆ
從龍誰解盡如雲　龍に從ひて　誰か解らん　盡く雲の如くなるを
張均兄弟皆何在　張均兄弟　皆何くにか在る
却是楊妃死報君　却って是れ　楊妃　死して君に報ず

張均・張垍兄弟は名宰相張説の子。張均は安祿山の僞命を受けて中書令となった。この詩において、徐寅は、安祿山の僞中書令となった張均を批判する一方、馬嵬において慘殺された楊貴妃について、却って「死して君に報いる」忠義を示したものだとの同情を示す。因みに四庫全書本『徐正字詩賦』の書前提要には、この詩中の「張均兄弟皆何在、却是楊妃死報君」の二句をあげ、「更に一飯も唐を忘れざる者の似し」と賞讃している。

また、『全唐詩』巻七一四によれば、閩中において黄滔と親交を深めた（『十國春秋』巻九十五）崔道融にも次の如く楊貴妃故事を詠んだ詩が現存する。まず「羯鼓」と題する七絶詩である。

華清宮裏打撩聲　華清宮裏　打撩の聲
供奉絲簧束手聽　供奉　絲簧　束手して聽く
寂寞鑾輿斜谷裏　寂寞たり　鑾輿　斜谷の裏
是誰翻得雨淋鈴　是れ誰ぞ　雨淋鈴を翻し得ん

詩題の羯鼓は玄宗が善くした鼓の名。唐・南卓『羯鼓錄』に見える。場面設定が必ずしも明確でないが、この詩は先の徐寅の「再幸華清宮」詩と同じく、七五八年、長安に幽居する明皇（玄宗）が楊貴妃ゆかりの華清宮に單獨

で行幸し、望京樓[19]において雨淋鈴の曲を演奏した時の詩と解する。曾てなじみの華清宮において明皇の演じる羯鼓の音に宮人はこぞって聽き入っている。曾て幸蜀の途次に斜谷中で聞いたという雨淋鈴の曲[19]は、當事者たる明皇にしか分らない寂寞の哀調を帶びて切々と響くのであった。

また、「馬嵬」と題する七絶詩がある。

萬乘淒涼蜀路歸　萬乘　淒涼として　蜀路を歸る
眼前朱翠與心違　眼前の朱翠　心と違へり
重華不是風流主　重華は是れ風流の主ならず
湘水猶傳泣二妃　湘水　猶ほ傳ふ　二妃の泣くを

この詩は、楊貴妃を亡くした玄宗が寂しく蜀より長安へ歸る樣を描く。作者はここで、重華（虞舜）を玄宗に、二妃を楊貴妃に、また湘水を渭水に比定し、馬嵬の墓に眠る楊貴妃の恨みを代弁するのである。

更に、「鑾駕東回」と題する七絶詩がある。

兩川花捧御衣香　兩川　花捧げて　御衣香し
萬歲山呼輦路長　萬歲　山と呼びて　輦路長し
天子還從馬嵬過　天子　還た馬嵬に過るも
別無惆悵似明皇　別に惆悵の明皇に似たること無し

第三句に「天子還た馬嵬に過る」とあることから、この詩は、晚唐の僖宗が八八五年、「兩川」（四川の東川と西川）

より長安へ還御する途次に馬嵬を通過しての感懐を詠んだものと察せられる。この詩では、羅隱の「帝幸蜀」詩と同じく、馬嵬の楊貴妃墓を過る僖宗の目を通して明皇が追憶されているようである。

以上にあげた羅隱・徐寅・崔道融詩に見える楊貴妃故事、とりわけ馬嵬の楊貴妃墓を詠んだ詩は、三名と黄滔との交友の深さから言って、黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」に何らかの直接間接の影響を與えたであろうことを預測させるが、詩作の先後も含めて詳細なことは分らない。

しかしながら、晩唐五代に活躍したこれら詩人の間に楊貴妃故事に取材した詩作の嗜好が背景として根強くあり、黄滔の該賦は、それらの底流の下に始めて出現したものであることは、以上の擧例からほぼ確證が得られたといってよいであろう。

七

黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」は、馬嵬の楊貴妃墓をめぐる楊貴妃故事に取材した叙情性豊かな律賦である。律賦はもともと唐宋の科擧試に出題された韻文を指していうが、黄滔のこの賦は、明皇の故事を表題中に含み、その直前に僖宗の〝僖宗迴駕經馬嵬〟故事を有するので、實際に科擧試に出題されたとは考えられない。むしろ作者の意圖は、もっぱら楊貴妃墓にたたずむ明皇の心中を如何に叙情的に描寫するかにあった様に思われる。すなわち、黄滔は、新奇な律賦の形式を藉りて、そこに文學作品の内容を持たせることに意を用いたのである。

このように、晩唐の律賦が數ば科擧の實用文の桎梏を脱して純文學作品へと移向することがあった現象につい

て、清・李調元の『賦話』[13]は、宋・洪邁の『容斎四筆』巻七の説を引きつつ、いみじくも次のように指摘する。

○『偶雋』[19]にいふ、晩唐の士人は律賦を作るに、多く古事を以て題と爲し、悲傷の旨を寓す。吳融・徐寅の諸人の如きは是なりと。黄文江滔も亦た此を以て名を擅にす。「唐明皇回駕經馬嵬坡」を賦し、隔句に云ふ、「日慘風悲、到玉顔之死處、花愁露泣、認朱臉之啼痕」・「褒雲萬疊、斷腸新出于啼猿、秦樹千層、比翼不如于飛鳥」・「羽衞參差、擁翠華而不發、天顔愴恨、覺紅袖之難留」・「六馬歸秦、卻經過於此地、九泉隔越、幾悽愴于平生」と。……（略）……凡そ此の十數聯、皆研確精微にして、當時に傳諷せらる。（巻九）

○（律賦は唐の）晩季に逮び、新奇を好み尚び、始めて「館娃宮」「景陽井」及び「駕經馬嵬坡」「觀燈西凉府」の類有りて、妍を爭ひ巧を鬪はし、章句益す工なり。（巻二）

ここで李調元は、黄滔の該賦を含む晩唐の律賦について、古事に取材して悲傷の趣旨をよせるものが多いこと、新奇さを好み、妍巧を競い、章句表現に巧みなものが目立つことを指摘している。これは、宋・洪邁の所説の援用であるが、黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」の文學作品としての價値を認めた重要な指摘である。

李調元はまた、特に黄滔の該賦を取りあげて、次のようにも賞贊する。

唐の黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」に云ふ、「褒雲萬疊、斷腸新出於啼猿、秦樹千層、比翼不如於飛鳥」と。至りて悽愴爲り。又「六馬歸秦、却經過于此地、九泉隔越、幾凄惻于平生」と。「歸秦」「隔越」は是れ借對法にして、皆極めて華瞻風雅なり。[21]按ずるに、此等の題は、先朝を指斥して、頗る輕薄なるを嫌ふ。唐人の馬嵬を咏める詩甚だ多し。文江は更に之を演じて賦と爲せし耳。芋眠凄戾にして、「長恨歌」「連昌宮詞」に減らず。

「芊眠」とは陸機「文賦」の語であり、『文選』巻十七の李善注によれば「光色盛んな貌」である。先の李調元の引文にいう「爭妍鬬巧」の謂であろう。また「悽愴」「凄戾」は同じく「悲傷之旨」に相當するであろう。すなわち、ここで李調元は、黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」の妍巧なる表現といい、悲傷の情趣といい、白居易の「長恨歌」、元稹の「連昌宮詞」に較べても見劣りがしないと激賞するのである。

李調元がここに白居易「長恨歌」、元稹「連昌宮詞」を引き合いに出すのは、論述上の要請もあってか、少しくほめすぎの感がないでも無い。後世の文學的影響を考えても、黄滔の該賦が白居易の「長恨歌」に遙かに及ばないことは言うまでもない。しかしながら、私の見るところ、中唐の白居易、元稹のそれらの詩と晩唐五代の黄滔の該賦とは、ともに當時における楊貴妃故事の最も好ましい文學形式への集成昇華という點で共通性を持つ。すなわち、陳鴻「長恨歌傳」の記述によれば、元和元年（八〇六）十二月の日付を有する白居易の「長恨歌」は、渭水北岸にある馬嵬のほぼ南岸に近い盩厔仙遊寺において構想された。當然ながら、楊貴妃沒後五十年を經た楊貴妃故事と、當時馬嵬―盩厔の近郷に傳えられていたであろう楊貴妃傳説とが、その詩中に巧みに取り入れられていることが容易に推察できる。また、元和十三年（八一八）に作られたとされる元稹の「連昌宮詞」[23]も、傳えられた多くの楊貴妃故事が同様に集成されて成ったものである。黄滔の該賦もまた、前章において檢證した様に、詩友の楊貴妃故事の好尚がその背景にあって成ったものと考えられる。してみれば、黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」と白居易「長恨歌」、元稹「連昌宮詞」とは、自ずからその形式や主題等を異にするものの、その當時における楊貴妃故事の最も巧みな文學作品への昇華という點で共通性を持つであろう。黄滔の場合、律賦の形式に據ったことが、新奇な試

みの一つでもあった。このように考えれば、先の李調元の言及も、あながち過褒とばかりはいえまい。

私が本稿の表題に冠した「楊貴妃文學史」とは、楊貴妃の生前から沒後、そして今日に至るまで、彼我（中國・日本）の楊貴妃故事を扱った文學作品を通してみたテーマ別文學史の一流派の謂である。今試みに、その各章を構成する目ぼしい作品をあげれば、

李白「清平調詞三首」「宮中行樂詞八首」
杜甫「麗人行」「哀江頭」
白居易「長恨歌」
元稹「連昌宮詞」
杜牧「華清宮詞三十韻」「過華清宮三絶句」
張祜「華清宮和杜舍人」[24]
鄭嵎「津陽門詩」
溫庭筠「過華清宮二十二韻」
王伯成「天寶遺事諸宮調」
白樸『梧桐雨』
吳成美『驚鴻記』
孫郁『天寶曲史』

洪昇『長生殿』

等等、綺羅星の如く並ぶ中國文學史上の主要作品を包括してあげることができる。(25)

私が本稿において取り扱った黄滔の律賦「明皇迴駕經馬嵬賦」もまた、これらの諸作品から成る所謂楊貴妃文學史上において、唐末五代の峽谷に花開いた一つの精華であった。それは、文學史上の一主峰たる白居易の「長恨歌」と違い、後世に大きな影響を與えることは竟に無かった。律賦の運命と共に、その賦の影響も忽焉として消え失せる。唐末五代、福建の片田舍に隱棲した黄滔は、白居易と違い、文學史の主流にはなり得なかったのである。蓋し、敢て言うならば、黄滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」は、楊貴妃文學史上において、次の宋金の時代に「天寶遺事諸宮調」が語られ、元曲「梧桐雨」が出現する以前の五代梁において、美しくも花開いた、さても可憐な一朶の仇花であったといい得ようか。

（一九八九年八月）

註

（1）ここには落下者は九名しか列記していない。いま徐松注によって補なう。このうち王貞白詩は『全唐詩』卷七〇一に、張蠙詩は同卷七〇二に收められる。

（2）黄公度、黄沃父子の記事は陸心源『宋史翼』卷二十四に見える。

（3）翁承贊は閩の人。乾寧三年（八九六）の進士であり、同鄉の黄滔とは親交が深い。黄滔は乾寧二年（八九五）の進士である。

（4）上海圖書館編『中國叢書綜錄』二册、一二三九頁參照。

（5）鈴木虎雄『賦史大要』（冨山房、昭和十一年）二四〇―二四四頁にわかりやすく圖示する。

（6）楊貴妃の最期に關わる描寫として、杜甫の「哀江頭」詩に「血汚游魂歸不得」とあり、白居易「長恨歌」に「宛轉蛾眉馬前死、翠翹金雀玉搔頭、君王掩面救不得、回看血淚相和流」とあり、李益「過馬嵬二首」其一に「太眞

血染馬蹄盡」とあり、また鄭嶠「津陽門詩」は「長眉鬢髮作凝血」とする。更に杜牧「華清宮三十韻」に「喧呼馬嵬血零落羽林槍」とあり、張祜又は趙嘏又は薛能又は溫庭筠「華清宮和杜舍人」に「雪（一作血）埋妃子貌」とある。これらはいずれも楊貴妃の死が鮮血にまみれた慘殺であったことを連想させる表現である。黄滔のこの賦の四「面之霜蹄踐入」もほぼこの方向に沿った描寫である。元・王伯成の「天寶遺事諸宮調」に「踐楊妃」が殘存し（『雍熙樂府』卷五、仙呂宮勝葫蘆）、また『雍熙樂府』卷七所收「遺事引」（哨遍）に「萬馬蹄邊妃子亡」とあるのも同傾向の描寫であろう。また、劉禹錫「馬嵬行」に「貴人飲金屑、倏忽舜英暮」とあるのは、その服毒死を思わせる。これらの直截的でリアルな表現に比べれば、『舊唐書』卷五十一楊貴妃傳に『遂縊死於佛室』といい、『新唐書』卷七十六楊貴妃傳に「縊路祠下」といい、『資治通鑑』卷二一八に「上乃命力士引貴妃於佛室、縊殺之」といい、姚汝能『安祿山事迹』卷下に「遂縊於佛室」といい、陳鴻「長恨歌傳」に「竟就死於尺組之下」といい、『太眞外傳』卷下に「力士遂縊於佛堂前之梨樹下」とあるのは、楊貴妃の死をかなりソフトに婉曲に、或いは小說的に表現したものだと思われる。ただし、楊貴妃の死が實際にどのようなものであったのか、後世の我々には如上の史實や文學表現が殘されているのみであり、事實と虛構の判斷にとまどう。なお吉川幸次郎『杜甫詩注』三（筑摩書房、昭和五四年）の「哀江頭」注の余論四に楊貴妃の死について詳說し、『太平記』卷三七にまで言及する。さらに顏元叔『馬前死』―論『長恨歌』的辭構」（『中外文學』一九六八・一一、『楊貴妃故事』（天一出版社、一九八二年）所收）を參照。

（7）『通鑑』卷二二〇、肅宗至德二載（七五七年）條に、「十二月、丙午、上皇至咸陽」とある。また『舊唐書』卷九、玄宗本紀には「十二月丙午、肅宗具法駕、至咸陽望賢驛迎奉」とある。馬嵬は咸陽の西約三〇kmにある驛である。

（8）楊貴妃墓は、逃避行中の突發事でもあり、當初はただ土盛りをした極く簡單なものだったと思われる。『太眞外傳』卷下には、「西郭の外一里許り、道北の坎下に瘞む」と述べる。中唐・劉禹錫の「馬嵬行」には「路邊楊貴人、墳高三四尺」とある。また、宋・鄭剛中『西征道里記』（清・胡鳳丹輯『金華叢書』所收、『馬嵬志』卷一所引）には、「塚土數尺高、拱雜木二三本、曰楊妃塚」とある。

（9）更に七五八年十月、明皇が單獨で華清宮に行幸した事も

興味ある史實であるが、この故事を詠んだ文學作品については別稿において考察したい。

(10) 『馬嵬坡詩選』(張過・何冰編、華岳文藝出版社、一九八八年)。

(11) 岡村繁譯注『白氏文集』四(明治書院、新釋漢文大系一〇〇)のうち、卷二一詩賦の譯注を參照。

(12) 馬積高『賦史』(上海古籍出版社、一九八七年)。

(13) 清・李調元『賦話』(『叢書集成』初編所收)。

(14) 『莆陽黃御史集』本、及び『全唐詩』卷七〇六においては、この三首は、「馬嵬」(錦江……)、「馬嵬(二首)」(鐵馬……、龍腦……)の二題として分別載錄されている。

(15) 四庫全書本を用いる。

(16) 『中國詩人論—岡村繁教授退官記念論集』(汲古書院、一九八六年所收)。

(17) 雍文華校輯、中華書局、一九八三年。

(18) 四庫全書本を用いる。

(19) 『太眞外傳』卷下に、

又至斜谷口、屬霖雨涉旬、於棧道雨中聞鈴聲、隔山相應。上既悼念貴妃、因採其聲爲雨霖鈴曲、以寄恨焉。

楊貴妃文學史上における黃滔の「明皇迴駕經馬嵬賦」(竹村)

至德中、復幸華清宮。從官嬪御、多非舊人。上於望京樓下命張野狐奏雨霖鈴曲。曲半、上四顧淒涼、不覺流涕。左右亦爲感傷。

とある。故事は『明皇雜錄』にも見える。

(20) 『偶雋』は以下に續く記事の出典と思われるが未見。なお、引用文の記事は宋・洪邁『容齋四筆』卷七に出據する。

(21) 『函海』に據った『叢書集成初編』本『賦話』の引用文が「九皇」に作るのは誤り。

(22) 同じく「華瞻」に作るのは誤り。

(23) 陳寅恪『元白詩箋證稿』、及び卞孝萱『元稹年譜』參照。

(24) 一作趙嘏、一作薛能、一作溫庭筠。『全唐詩重篇索引』(河南大學唐詩研究室編、河南大學出版社、一九八五年)參照。溫庭筠のそれは『溫飛卿詩集箋注』(清・曾益等箋注、上海古籍出版社、一九八〇年)卷九集外詩に見える。

(25) 資料集として清・胡鳳丹『馬嵬志』(美漢出版社、用光緒三年胡氏退補齋版影印出版、一九六七年)がある。

附録

明皇迴駕經馬嵬賦①　以程及曉留芳魂顧跡爲韻

明皇駕を迴らし馬嵬を經るの賦

程・及・曉・留・芳・魂・顧・跡を以て韻と爲す

長鯨②入鼎兮中原　長鯨　鼎を中原に入れ

2 六龍迴轡兮蜀門　六龍　轡を蜀門より迴らす

杳鼇闕而難尋艷質　鼇闕杳かにして　艷質を尋め難く

4 經馬嵬而空念香魂　馬嵬を經て　空しく香魂を念ふ

日慘風悲　到玉顏之死處

日慘く風悲し　玉顏の死せし處に到れば

6 花愁露泣　認朱臉之啼痕

花愁ひ露泣く　朱臉の啼きし痕を認む

莫不積恨緜緜　積恨緜緜として

8 傷心悄悄　傷心悄悄たらざるは莫し

逝川東咽以無駐　逝川　東に咽びて　以て駐まる無く

10 夜戸下扃而莫曉　夜戸　扃を下して　而して曉くる莫し

褒雲③萬疊　斷腸新出於啼猿

褒雲萬疊　斷腸新たに啼猿より出づ

12 秦樹千層　比翼不如於飛鳥

秦樹千層　比翼も飛鳥に如かず

初其漢殿如子　初め其れ　漢殿には子の如きにして

14 燕城若鏘　燕城には鏘なるが若し

驅鐵馬以飛至　鐵馬を驅り　以て飛ぶがごとく至れば

16 觸金輿而出遊　金輿を觸れ　而して出遊す

謀於劍外　劍外に謀らんとして

18 駐此原頭　此の原頭（馬嵬）に駐まる

羽參衞差　擁翠華而不發

羽衞參差として　翠華を擁して發せず

20 天顏愴恨　覺袖紅以難留

天顏愴恨として　紅袖（楊妃）の以て留め難きを覺る

鴛鴦相驚　鴛鴦相ひ驚き

22 熊羆漸急　熊羆漸く急なり

千行之珠淚流下　千行の珠淚　流れ下ち

24 四面之霜蹄踐④入　四面の霜蹄　踐み入る

神僊表態　忽零落⑤以無歸

神僊の表態　忽ち零落して以て歸る無く

26 雨露⑥成波　已沾濡而不及

雨露波と成り　已に沾濡するも及ばず

棧閣重處　棧閣重なれる處

28 珠旒去程　珠旒去りし程

玉壘之雲山暫幸　玉壘の雲山に暫し幸して

30金城⑦之烟景旋清　金城の烟景　旋た清らかなり
六馬歸秦　却經過於此地　六馬秦に歸るに　却って此の地(馬嵬)を經過すれば
32九泉隔越　幾凄惻於平生　九泉に隔越して　幾ば平生を凄惻す
釵飄彩鳳之蹤　釵に飄る　彩鳳の蹤
34鬢蛻玄蟬之跡　鬢に蛻す　玄蟬の跡
茫茫而今日黃壤　茫茫たり　今日の黃壤
36歷歷而當時綺陌　歷歷たり　當時の綺陌
雨鈴製曲　徒有感於宮商　雨鈴　曲を製して　徒に宮商に感ずる有り
38龍腦呈香　不可返其魂魄　龍腦　香を呈するも　其の魂魄を返すべからず
空極宵夢　空しく宵夢極きたり
40寧逢曉粧　寧ぞ曉粧に逢はん
輦路見梧桐半死　輦路に梧桐の半ば死するを見
42烟空失鸞鳳雙翔　烟空に鸞鳳の雙び翔るを失す
鏡殿三春⑧莫問菱花之照耀　鏡殿の三春　菱花の照耀たるを問ふ莫れ
44驪山七夕　休瞻榆葉之芬芳　驪山の七夕　榆葉の芬芳たるを瞻るを休めよ
大凡有國之尊　大凡　國を有つの尊きも
46罕或傾城之遇　傾城の遇するは罕し
執言天寶之南面　執か言はん　天寶の南面するありて
48奚指坤維而西顧　奚んぞ坤維を指して　西に顧けんや
然則起兵雖自於青娥　然らば則ち　起兵は青娥よりすと雖も
50斯亦聖唐之數　斯れ亦た聖唐の數なり

原(上平聲、元韻)、門・魂(上平聲、魂韻)、痕(上平聲、痕韻)……元・魂・痕韻は同用。悄(上聲、小韻)、曉・鳥(上聲、篠韻)……小・篠韻は同用。讎・遊・留(下平聲、尤韻)、頭(下平聲、侯韻)……尤・侯韻は同用。急・入・及(入聲、緝韻)。程・清(下平聲、清韻)、生(下平聲、庚韻)……清・庚韻は同用。跡・魄(入聲、昔韻)、陌(入聲、陌韻)……昔・陌韻は同用。粧・翔・芳(下平聲、陽韻)、遇・數(去聲、遇韻)、顧(去聲、暮韻)……遇・暮韻は同用。(◉は題韻。『廣韻』に據った。)

① 底本は四庫全書本を用いる。韵→韻、元→玄等、異体字、別体字、避諱字は元来の正体字に復している。なお叢書集成本、四部叢刊本、全唐文本、歴代賦彙本、馬嵬志本ともに文意の構造に関わる大きな異同は無い。

② 貪欲な悪人。安禄山をいう。

③ 長安南方、終南山中の褒谷斜谷に浮ぶ雲の意。次句「秦樹」の対。

④ 楊貴妃末期の描写について、本文註（6）参照。

⑤ 貴人（ここは楊貴妃）の死をいう。

⑥ 玄宗の天恩に喩える。白居易『白氏文集』巻十九、「梨園弟子」詩（一二九〇）に、「五十年前雨露の恩」と。

⑦ 蜀の成都を指す。

⑧ 鏡殿は長安の宮殿。三春は三回の春。三年。玄宗（明皇）は七五七年十二月に長安に還御した後、七六二年四月に崩御する。この間の五春を詩語として三春と表現したと解する。